SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

薬の神じゃない！
（我不是薬神/Dying to Survive）

2017 年／中国映画
配給：株式会社シネメディア／117 分

2020（令和 2）年 10 月 23 日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data

監督・脚本：文牧野（ウェン・ムーイエ）
出演：徐峥／王传君／周一围／谭卓／章宇／杨新鸣

みどころ

中国で大ヒットするのは『戦狼２　ウルフ・オブ・ウォー２』（17 年）のような“国策映画”だけ？そう思っていたが、意外にも実在の“ニセ薬事件”をテーマにした本作が大ヒットした上、薬価を巡る中国政府の政策を変更させるという政治効果まで！こりゃ、すごい！

韓国で１６００万人を動員した最大のヒット作『エクストリーム・ジョブ』（19 年）の５人の刑事たちに勝るとも劣らない個性を発揮するのが本作に登場する５人の密輸・密売団の面々。美女が１人含まれているのも同じだが、コメディタッチの前半とは異なり、後半から見せる人間味タップリの問題提起に注目！

もし、あなたが裁判官なら、逮捕され、起訴された彼らにどんな判決を・・・？

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■中国で大ヒットの問題提起作を、やっと鑑賞！■□■

原題を『我不是药神』、邦題を『薬の神じゃない！』とする、２０１８年に中国で大ヒットし、５００億円の興行収入を挙げた中国映画を、私は中国人の友人から聞いていたが、日本ではなかなか公開されなかった。同じように中国で大ヒットし、アジア映画歴代トップの、１０００億円の興行収入をたたき出した『戦狼２　ウルフ・オブ・ウォー２』（17 年）も日本ではなかなか公開されなかったが、これについては、２０１９年１１月２３日にデスクのパソコン上のネット配信映像で見ることができた（『シネマ 41』136 頁）。

「中国版ランボー」と呼ばれる主人公が大活躍する同作のラストに、中国のパスポートが大映しされたことには驚いたが、それと同時に、アフリカを舞台とした同作は、一帯一路戦略への中国人民の期待（？）と、トランプ大統領に対する強い対抗心を感じざるを得なかった。それと同時に、「朝鮮有事」も「台湾有事」も念頭になく、ひたすら平和で豊か

な国・ニッポンに安住している日本国民の能天気さが心配になったが、それは、また別の問題だ。

２０２０年２月以降はコロナ騒動のため、私が期待していた『ムーラン』の公開が延期されたうえ、劇場公開から Netflix での公開に切り替えられたから、今なおその鑑賞はできていない。そんな中、１０月２３日から念願の本作が公開されることになったので、さっそく劇場へ！

■□■大ヒット作の主人公がこんなダメ男！？これでいいの？■□■

本作の主人公は、上海で強壮剤の販売店を営むチョン・ヨン（シュー・ジェン）だが、店には客が全然来ないらしい。暇そうにタバコをふかしているチョンの店にやってきたのは、家賃の取り立てと立ち退きの要求にやってきた家主だけだったから、ひどいものだ。家に帰ると白血病で寝たきりになっている父親の世話に追われるうえ、離婚を迫ってくる妻とは８歳になる息子の養育権争いが熾烈を極め、妻は弁護士を立てる事態になっていた。

そんな八方ふさがりの中、ある日、三重マスクをした怪しげな男・リュ・ショウイー（ワン・チュエンジュン）が、インドで売られている格安の慢性白血病の薬を輸入してくれと依頼してきた。話を聞くと、この男自身が慢性白血病の患者で薬を手放せないが、中国で正規に売られている薬は高価なため、このまま続ければ家計を圧迫し、破産してしまうらしい。しかし、インドで売られている薬は同じ効能で値段が２０分の１だから、インドから強壮剤を仕入れるルートを持つチョンがこれを輸入してくれれば、自分はもちろん、周りにたくさんいる、薬を不可欠としている白血病患者にも安く売ってあげることができるというものだった。リュの申し出は、国の許認可を受けていない薬をチョンの手で中国に密輸し、中国国内で一緒に販売（密売）しようというものだからヤバイ。いくら金に困っていても、インドからの正規ルートで強壮剤を輸入して、上海で合法的に販売している善良な商売人のチョンが、そんな話に乗らなかったのは当然だ。

子供の養育権のため弁護士を立てた妻との交渉の席で、腹を立てたチョンが、妻のみならず弁護士にも殴りかかる風景を見ていると、いかにも「これぞ中国流！」という荒っぽさを私が感じたのは当然。そしてまた、そこでは一瞬、大ヒット作たる本作の主人公がこんなダメ男でいいの？そう思ってしまったが・・・。

■□■正規の薬はなぜこんなに高いの？インドの薬はニセ薬？■□■

本作導入部では、白血病の薬を高価で販売している製薬会社に、多くの白血病患者が「値段が高すぎる。」「こんな高価な薬を長い間飲み続ければ、カネが尽き、破産してしまう。」「値段を下げろ。」と抗議するシークエンスが登場する。しかし、２０２０年２月以降、全世界をパンデミック（集団感染）に陥れた新型コロナウィルスの治療薬やワクチンの開発がいかに大変かを考えれば、新薬の価格が高いのは、当然だ。

一般的に、薬は「医薬用医療品」と「一般用医薬品」に分けられ、一般用医薬品はさら

に「新薬」と「ジェネリック医薬品」に分けられる。新薬は９～１７年もの歳月と、数百億円以上の費用をかけて開発されるため、開発した製薬会社には特許の出願によってその薬を独占的に製造する権利が与えられるが、特許期間を過ぎるとその権利は国民の共有財産となるため、他の製薬会社から同じ有効成分を使った薬が販売できるようになる。それがジェネリック医薬品だ。リュが目を付けたインドの安い薬は中国政府の認可を受けていないものだから、ジェネリック医薬品とは異なるもの。したがって、仮にそれが、中国政府が公認し、中国の製薬会社が高価で発売している薬と成分が全く同じでも、法的には違法となる。すると、その密輸・密売が重罪になるのは当然だ。

■□■密輸は独力で！■□■

明治維新によってアジアで最初の近代民主主義国家になった日本は、曲がりなりにも西欧流の法治国家になった。そして、太平洋戦争の敗北によって明治憲法から新憲法に変わった日本は、とりわけ刑法と刑訴法の分野で新たにアメリカ法の考え方が輸入された。他方、民法では、家族法の分野が大幅に改められたものの、契約法の分野では変化は少なく、契約の概念は戦前の民法からそれなりに確立されてきた。そのため、民法上は契約（合意の成立）に書面は不可欠ではなく、口頭だけの合意で成立するが、重要な契約では契約書を交わすのが通常になっている。しかし、１９４９年に新中国（＝中華人民共和国）を建国したものの、近代民主主義国家ではなく、共産党一党独裁の国・中国では？

当初あれほどきっぱりリュからの申し出を断り、「気が変わったらここに電話してくれ。」と言って渡されていたメモ書きも、どこに行ったかわからない状態だったチョンも、いよいよ金に困ってくるとどうしようもなく、ついにリュに電話することに。その結果、「前金で報酬を。」という要求は満たされたものの、チョンはリュとハッキリした契約書を交わすことなく、「密輸さえできれば販売網は大丈夫。」と言うリュの言葉を安易に（？）信用して、単身インドに渡ることに。

近時の中国は、トランプ大統領率いるアメリカとの間で新冷戦状態に陥っているだけでなく、対オーストラリアの関係がヤバいうえ、中印の国境を巡っては一部で軍事衝突も起きている。２０１４年に現実に起きた事件をモデルにした本作の時代設定も２０１４年。大ヒットし、第８１回アカデミー賞を受賞した『スラムドッグ＄ミリオネア』(08年)（『シネマ22』29頁）に見る、インドの地方都市はひどい衛生状態だったが、本作に見る２０１４年のインドもかなりひどい。そんなインドで、白血病の薬を販売している男が、中国から単身、その仕入れにやってきたチョンを不審に思ったのは当然だ。しかし、誠心誠意（？）「販売してくれ。」と訴えてくるチョンの熱意に打たれたのか、この男はチョンへの販売を認めてくれたばかりか、中国で一定量の販売ができれば、代理店にしてやると約束してくれたからチョンはヤッター！もちろん、これも書面によるものではなく、口約束だから、その信憑性には大いに疑問があるが、そんなことは気にしないのが中国流、そしてインド

流だ。とんとん拍子に話がまとまったのと同じように、出荷（密輸）、販売（密売）もとんとん拍子に進んだから、チョンとリュはウハウハ！正規（悪徳）の製薬会社が、一瓶４万元で売っている薬を、チョンとリュは５千元で売ったから、その密輸品は飛ぶように売れたうえ、利益もガッポガッポと・・・。

■□■密売の協力者が次々と！この美女も一味の一人？■□■

観客動員数１６００万人を突破し、「韓国の歴代観客動員者数No.１！」になった映画が『エクストリーム・ジョブ』（19年）（『シネマ46』239頁）。コメディタッチの同作には１人の女性を含む５人の個性派刑事が登場し、捜査のみならず、水原カルビ味チキンづくりに精を出していた。

それと同じように（？）、本作もインドからの密輸はチョン・ヨンの単独行動だったが、上海での販売（密売）網の構築には、チョン・ヨン、リュ・ショウイーの他、新たに３人の個性的なメンバーが加わるのでそれに注目！その第１は、白血病患者の掲示板を運営している女、リウ・スーフェイ（タン・ジュオ）。私が中国映画を見る楽しみの一つは美人女優を見ることだが、リウ・スーフェイは白血病患者の子供の高い薬代を払うために、ポールダンサーの仕事で高給を稼ぎながら、この仕事をしている美女だ。どこかで見た女優だと思っていると、映画ではなく私が近時ハマっている中国ドラマ『瓔珞＜エイラク＞～紫禁城に燃ゆる逆襲の王妃～』に出演している女優だった。前半はコメディタッチ、後半は社会問題提起型の感動作として構成されている本作には、色気が入るスキ間はないと思っていたが、意外にも「あわや・・・。」というちょっとしたエピソードも登場するので、それをお見逃し無きように・・・。

第２は、金髪の不良少年ボン・ハオ（チャン・ユー）。彼はフー・ボー監督の『象は静かに座っている』（18年）（『シネマ46』201頁）に出演していた若手俳優だが、ほとんどセリフのない本作のボン・ハオ役で「第５５回金馬奨」「第３２回金鶏奨」の助演男優賞にノミネートされたそうだ。たしかにこの若者は一見アホバカ風だが、ストーリーの節目節目に登場してくるとともに、ラストではあっと驚く重大な役割を果たすので、それに注目！

第３は、リウ牧師（ヤン・シンミン）。マルクスレーニン主義を信奉する中国では、宗教はアヘンと同じだから白眼視されており、地下に潜っている教会も多い。リウ牧師がどこまで神の教えに忠実なのかは知らないが、彼がニセ薬の販売グループに参加したのは、中国なまりの英語を喋れるという特殊能力のため。もちろん、教会に集まる信者の中には多くの白血病患者がいたから、彼らを安価な薬によって救いたいという思いがあったのは間違いない。しかし、それによって一儲けしようとたくらんでいたなら、牧師失格だが・・・。『エクストリーム・ジョブ』の５人の刑事たちに勝るとも劣らない、この超個性的な５人の密売グループの面々は、以降どんな活躍を？

■□■警察の捜査は？刑事の苦悩は？その選択は？■□■

何事も“程度問題”。したがって、ニセ薬の密輸・密売活動がほどほどの規模なら、製薬

会社も見逃すことができるが、チョン・ヨンたちのニセ薬が上海市内で爆発的に売れ始めると、製薬会社も、その訴えを聞いた警察も動かざるを得なくなったのは仕方ない。姿を見せない猟奇連続殺人犯の捜査が大変なことは、多くのスリラー、サスペンス、犯罪映画で明らかだし、大規模なニセ薬の密輸・密売事件なら、ヤクザ（黒社会）が絡んでいるのが普通。大規模に展開される捜査員の一人として精力的に動くツァオ・ビン刑事（ジョウ・イーウェイ）は当初そう考えていたようだが、犯人たちは意外にも・・・。

どんな組織でも同じだが、犯罪捜査を描く映画に登場する警察では、現場で走り回る刑事の熱心さと、好き勝手な命令ばかり出す上層部のいい加減さが対比されることが多い。本作もその典型で、上層部の目標はとにかく犯人を一定期限までに検挙すること、それだけだ。しかし、第一線の現場で走り回るツァオ・ビン刑事は、チョン・ヨンたちがなぜ危険を犯してまで安価な薬を密輸した上、儲けを度外視してまでそれを患者に販売しているのかがわかってくると・・・。「お前たちは何も考えず、命令に従って犯人を検挙すればいいんだ。」と言われても、やっぱり・・・。

本作中盤では、現金をカバンに詰めても詰めても入りきらないほどの儲けにウハウハ状態だったチョン・ヨンたちの姿が描かれているが、後半では一転して、売れば売るほど損が拡大するという状況下でも、患者のために販売値段を上げずに頑張るチョン・ヨンたちの姿が登場するので、それに注目！観客がそんな姿に感動を覚えるのは当然だが、警察の捜査陣たちは如何に・・・？その一員たるツァオ・ビン刑事が観客と同じように感動したとしても、それは決して不思議なことではないが・・・。

■□■映画が社会（政治）を変える原動力に！？■□■

去る１０月１６日に公開された『鬼滅の刃~無限列車編~』（20 年）は、３日間で４６億円の興行収入を挙げ、１０日で１００億円を突破した。しかし、本作はそれ以上で、公開直後の３日間で９億元（１４６億円）、最終的に３０億元（約５００億円）を超える大ヒットを記録したからすごい。しかし、本作がすごいのは興行収入だけではなく、映画が社会（政治）を変える原動力になったことだ。日本でもそんな事例は極めて異例だが、中国ではまさに前代未聞の、ありえないほど異例のことだ。

それは、本作が大きな反響を呼び、中国１３億人民の幅広い社会的な議論を巻き起こしたことを受けて、習近平国家主席に続く序列第二位の李克強首相が、抗がん剤の薬価引き下げ等の措置を早期に実施するよう関係部局に指示したことだ。そこでは、「がん患者にとっては時間が命だ」とし、「政策の実行には一層のスピードアップが必要なこと」を明確にしたそうだから、さらにすごい！日本にやって来た中国人観光客がドラッグストアに押しかけて日本の薬を買い占める姿は珍しくないが、それは一体ナゼ？また、中国人が日本の保険制度を悪用してまで、日本で医療を受けたがるのは、一体ナゼ？本作を鑑賞した日本人観客は、そんなこともしっかり考える必要がある。さらに、最も大切なことは、本作で語られる「世の中に病は一つしかない。誰にも治せない、貧困という病だ。」の言葉をしっ

かり考えることだ。

ちなみに、本作の２倍となる１０００億円の興行収入をたたき出した『戦狼２　ウルフ・オブ・ウォー２』は、習近平国家主席が強力に推し進めている「一帯一路政策」への１３億中国人民の支持を取り付ける役割を果たしたが、それに続いて、同じ俳優・呉京（ウー・ジン）が主演した、中国の抗米援朝戦争（朝鮮戦争）出国作戦７０周年にちなんだ記念作品『金剛川』(20 年）が１０月２３日に公開されるや大ヒットしているらしい。折しも、１０月２５日は朝鮮戦争へ参戦７０周年の記念日。北京市の人民大会堂で開かれた、その記念大会で演説した習近平国家主席は、米国を念頭に、「覇権主義は必ず破滅に向かう道だ。」と述べ、「極限まで圧力をかけるやり方は全く通用しない。」と強調し、米国非難を繰り広げた。中国国営中央テレビ（CCTV）が中継する中で、習氏は、米国と戦い北朝鮮を助けたとする政治スローガン「抗米援朝」を２０回繰り返し、北朝鮮とは「血で固めた偉大な友好」と連携をアピールしたそうだ。そんな事情は、太平洋戦争中に日本でも大量に作られた「国策映画」としての「戦争映画」が果たした役割と同じだろう。

ところが、本作は、検閲の厳しい中国ではこんな社会問題提起作は上映できないかも？そんな危険を顧みずに製作され、上映された挙句、思いもかけず前述のような大ヒットになった上、社会（政治）を変える原動力になったわけだから、すごい。そんな良質かつ話題豊富な本作を鑑賞できたことに感謝。

２０２０（令和２）年１０月２６日記

『日本と中国』２２４７号（２０２０年１２月１日）

熱血弁護士

坂和章平

中国映画を語る(45)

（さかわ・しょうへい）１９４９年愛媛県松山市生まれ、大阪大学法学部卒。都市開発に関わる訴訟を数多く手がけ、日本都市計画学会「石川賞」、同年に日本不動産学会「実務著作賞」を受賞。「坂和的中国電影大観」（２００４年）、「ナニワのオッチャン弁護士、映画を斬る！」シリーズをはじめ映画に関する著書多数（公社）日中友好協会参与、ＮＰＯ法人大阪府日中友好協会理事。

薬の神じゃない！

全国順次公開中！ © 2020 Cine-C and United Smiles Co., Ltd. All Rights Reserved

中国医薬業界に改革をもたらした実際の事件を描く

２０１４年に中国で実際に起き、中国の医薬業界改革のきっかけになったジェネリック薬の密輸販売事件を映画化。18年に中国で５００億円の興行収入を挙げたことは中国人の友人から聞いていたが、日本ではなかなか公開されなかった。

上海で強壮剤の販売店を営むチョン・ヨン、店には閑古鳥が鳴き、妻にも見放され、白血病で寝たきりになっている父親の世話に追われる日々…。そんなある日、怪しげな男リュ・ショウイーが、インドで売られている格安の慢性骨髄性白血病の薬を輸入してくれと依頼してきた。この男自身がその患者で薬を手放せないが、中国で正規に売られている薬は高価のため、破産してしまう。しかし、インドで売られている薬は同じ効能で値段が20分の1だから、インドから強壮剤を仕入れるルートを持つチョンが輸入してくれれば、多くの白血病患者にも安く売ってあげられるというものだった。最初は申し出を断ったチョンだったが、金に目がくらみ、ジェネリック薬の密輸・販売に手を染めていくことに…。

一般的に、薬は「医薬用医療品」と「一般用医薬品」に分けられ、一般用医薬品はさらに「新薬」と「ジェネリック医薬品」に分けられる。新薬は長い歳月と膨大な費用をかけて開発されるため、製薬会社にはその薬を独占的に製造する権利が与えられるが、特許期間を過ぎるとその権利は国民の共有財産となり、他の製薬会社から同じ有効成分を使った薬が販売できるようになる。それがジェネリック医薬品だ。インドの安い薬は中国政府の認可を受けていないもので、ジェネリック医薬品とは異なるから、その密輸・密売が重罪になるのは当然だ。しかして、チョンたちの罪の行方は？本作は大きな反響を呼び、中国13億人民の幅広い社会的な議論を巻き起こし、社会（政治）を変える原動力になった異例作である。

原題：我不是薬神/Dying to Survive
監督・脚本：文牧野
出演：徐峥／王传君／周一围／谭卓／章宇／杨新鸣
製作年：2017年、中国、117分
配給：株式会社シネメディア